

私の一冊

社会福祉学科 佐藤桂子 先生

スーザン・バーレイ作・絵 『わすれられないおくりもの』

小鹿図書館 : 726.5/V 42 (評論社)

自分にとっての“わすれられないおくりもの”は何でしょうか？

私とこの本との出会いは、これまでに三度ありました。

一度目は、小学六年生のとき、クラス担任だった先生が、毎日「朝の会」と呼ばれる時間で本を紹介してくださり、そのうちの一冊がこの本でした。そのときの本の印象は“やさしいアナグマの話”でした。

二度目は、短大二年生になる春、父が病気で他界したときに、父の友人がくださった時です。しかし、しばらくは読む気にはなれず、一周忌が終わった後に読みました。そのときは、“父が残してくれたおくりものは何だろう”と考え、家族と話をしました。

三度目は、二年前に通っていた学校の卒業研究で、終末期ケアの研究をしていたときです。研究のためにいろんな論文を読んでいると、終末期の学びに、絵本を用いて教えることの効果について研究されている論文があり、その絵本の中に本書が含まれていました。その時、改めて本書を読んだときには、言葉では自分の感情を言い表せず、ただ涙が出ました。

この本は、絵本なんです。とても絵がきれい可愛らしくて、読みやすい本です。でも、読む時期(年齢)によって、感じ方は大きく違うと思います。

どんな本でしょうか？簡単に内容を紹介しますね。

年をとっているアナグマは、かしこくて物知りで、いつもみんなに頼りにされています。しかし、アナグマは「長いトンネルのむこうに行くよ さようなら アナグマより」という手紙を残して死んでしまいます。冬が始まり雪が降る中、森のみんなは悲しみに暮れます。

春が来て、みんなは外に出られるようになると、集まってアナグマの思い出を、語り合いました。モグラも、カエルも、キツネも、ウサギも、みんなアナグマとの思い出がありました。みんなは、アナグマが大切な“おくりもの”を残してくれたことに気づいていきました。

さあ、アナグマはどんな“おくりもの”を残してくれたと思いますか？

私は高齢者介護の仕事をしてきて、多くのお年寄りの方とお別れしてきました。「あんたが結婚するまでは生きてるよ」と言ってくれた笑顔が素敵な方、「身体だけには気をつけろよ」と心

配してくれてた方、「忙しくてもお化粧はしなきゃだめよ」と、お化粧が苦手だった私にお化粧の仕方を教えてくれた方、亡くなる直前に「ありがとう」と笑顔を見せてくれた方…。全ての方との思い出があり、全ての方から“おくりもの”をもらいました。

絵本は、自分が子供の頃や、子供と関わる機会がある人は読むことが多いかと思います。私の場合は、中学生くらいから絵本を読む機会は減っていました。しかし、2年前に本書と再会してから、他の絵本も読むようになりました。自分が昔読んだことがある本、表紙が綺麗な本、タイトルが面白い本…どの本を読んでも、その度に感じる事が沢山あります。絵本は、ページが少なく内容もわかりやすく書かれているので読みやすいですが、わかりやすい分、自分の気持ちに訴えかけてきてくれるものが多いと思います。

本書も、10分あれば読めてしまいます。そして、読み終わった後は何時間でも考えることができるかと思います。

ぜひ、読んでみてください。